

耳鼻咽喉科研修カリキュラム

2025 年 3 月（改訂）

耳鼻咽喉科領域研修委員会

1. 理念・使命

耳鼻咽喉科・頭頸部外科医師としての人格の涵養につとめ、耳、鼻・副鼻腔、口腔咽喉頭、頭頸部の疾患を外科的・内科的視点と技術をもって治療する。他科と協力し、国民に良質で安全な標準的医療を提供するとともに、さらなる医療の発展にも寄与することを耳鼻咽喉科専門医の使命とする。

2. 到達目標

- 1) 医師としてのプロフェッショナリズムを持ち、全人的な医療を行うとともに社会的な視点も併せ持ち、医療チームをリードすることができる能力を持つ。
- 2) 耳、鼻・副鼻腔、口腔咽喉頭、頭頸部領域に及ぶ疾患の標準的な診断、外科的・内科的治療を行うことができる。
- 3) 小児から高齢者に及ぶ患者を扱うことができる。
- 4) 高度急性期病院から地域の医療活動まで幅広い重症度の疾患に対応できる。
- 5) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の臨床研究、学術発表を行い、医学・医療のさらなる発展に貢献することができる。

＊ 専門医としての具体的な到達目標（表1）と経験症例数（表2）、年次ごとの到達目標（表3）を以下に示す。

表 1. 到達目標：下記の目標につき専門医としてふさわしいレベルが求められる。

基本姿勢・態度	
1	患者、家族のニーズを把握できる。
2	インフォームドコンセントが行える。
3	守秘義務を理解し、遂行できる。
4	他科と適切に連携ができる。
5	他の医療従事者と適切な関係を構築できる。
6	後進の指導ができる。
7	科学的根拠となる情報を収集し、それを適応できる。
8	研究や学会活動を行う。
9	科学的思考、課題解決型学習、生涯学習の姿勢を身につける。
10	医療事故防止および事故への対応を理解する。
11	インシデントリポートを理解し、記載できる。
12	症例提示と討論ができる。
13	学術集会に積極的に参加する。
14	医事法制、保険医療法規・制度を理解する。
15	医療福祉制度、医療保険・公費負担医療を理解する。
16	医の倫理・生命倫理について理解し、行動する。
17	感染対策を理解し、実行できる。
18	医薬品などによる健康被害の防止について理解する。
19	医療連携の重要性とその制度を理解する。
20	医療経済について理解し、それに基づく診療実践ができる。
21	地域医療の理解と診療実践ができる。(病診、病病連携、地域包括ケア、在宅医療、地方での医療経験)
耳	
22	側頭骨の解剖を理解する。
23	聴覚路、前庭系伝導路、顔面神経の走行を理解する。
24	外耳・中耳・内耳の機能について理解する。
25	中耳炎の病態を理解する。
26	難聴の病態を理解する。
27	めまい・平衡障害の病態を理解する。
28	顔面神経麻痺の病態を理解する。

29	外耳・鼓膜の所見を評価できる。
30	聴覚検査を実施し、その所見を評価できる。
31	平衡機能検査を実施し、その所見を評価できる。
32	耳管機能検査を実施し、その所見を評価できる。
33	側頭骨およびその周辺の画像(CT、MRI)所見を評価できる。
34	人工内耳の仕組みと言語聴覚訓練を理解する。
35	難聴患者の診断ができる。
36	めまい・平衡障害の診断ができる。
37	顔面神経麻痺の患者の治療と管理ができる。
38	難聴患者の治療・補聴器指導ができる。
39	めまい・平衡障害患者の治療、リハビリテーションができる。
40	鼓室形成術の助手が務められる。
41	アブミ骨手術の助手が務められる。
42	人工内耳手術の助手が務められる。
43	耳科手術の合併症、副損傷を理解し、術後管理ができる。
鼻・副鼻腔	
44	鼻・副鼻腔の解剖を理解する。
45	鼻・副鼻腔の機能を理解する。
46	鼻・副鼻腔炎の病態を理解する。
47	アレルギー性鼻炎の病態を理解する。
48	嗅覚障害の病態を理解する。
49	鼻・副鼻腔腫瘍の病態を理解する。
50	細菌・真菌培養、アレルギー検査を実施し、その所見を評価できる。
51	鼻咽腔内視鏡検査を実施し、その所見を評価できる。
52	嗅覚検査を実施し、その所見を評価できる。
53	鼻腔通気度検査を実施し、その所見を評価できる。
54	鼻・副鼻腔の画像(CT、MRI)所見を評価できる。
55	鼻・副鼻腔炎の診断ができる。
56	アレルギー性鼻炎の診断ができる。
57	鼻・副鼻腔腫瘍の診断ができる。
58	顔面外傷の診断ができる。
59	鼻中隔矯正術、下鼻甲介手術が行える。

60	鼻茸切除術・篩骨洞手術・上顎洞手術などの副鼻腔手術が行える。
61	鼻・副鼻腔腫瘍手術の助手が務められる。
62	鼻出血の止血ができる。
63	鼻科手術の合併症、副損傷を理解し、術後管理ができる。
64	鼻骨骨折、眼窩壁骨折などの外科治療ができる。
口腔咽喉頭	
65	口腔、咽喉頭、唾液腺の解剖を理解する。
66	喉頭、気管、食道の解剖を理解する。
67	扁桃の機能について理解する。
68	摂食、咀嚼、嚥下の生理を理解する。
69	呼吸、発声、発語の生理を理解する。
70	味覚障害の病態を理解する。
71	扁桃病巣感染の病態を理解する。
72	睡眠時呼吸障害の病態を理解する。
73	摂食・咀嚼・嚥下障害の病態を理解する。
74	発声・発語障害の病態を理解する。
75	呼吸困難の病態を理解する。
76	味覚検査を実施し、その所見を評価できる。
77	喉頭内視鏡検査を実施し、その所見を評価できる。
78	睡眠時呼吸検査の結果を評価できる。
79	嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査を実施し、その所見を評価できる。
80	喉頭ストロボスコープ検査、音声機能検査を実施し、その所見を評価できる。
81	口蓋扁桃摘出術、アデノイド切除術ができる。
82	咽喉頭異物の摘出ができる。
83	睡眠時呼吸障害の治療方針が立てられる。
84	嚥下障害に対するリハビリテーションや外科的治療の適応を判断できる。
85	音声障害に対するリハビリテーションや外科的治療の適応を判断できる。
86	喉頭微細手術を行うことができる。
87	緊急気道確保の適応を判断し、対処できる。
88	気管切開術とその術後管理ができる。
頭頸部腫瘍	
89	頭頸部の解剖を理解する。

90	頭頸部の生理を理解する。
91	頭頸部の炎症性および感染性疾患の病態を理解する。
92	頭頸部の先天性疾患の病態を理解する。
93	頭頸部の良性疾患の病態を理解する。
94	頭頸部の悪性腫瘍の病態を理解する。
95	頭頸部の身体所見を評価できる。
96	頭頸部疾患に内視鏡検査を実施し、その結果が評価できる。
97	頭頸部疾患に対する血液検査の適応を理解し、その結果を評価できる。
98	頭頸部疾患に対する画像診断の適応を理解し、その結果を評価できる。
99	頭頸部疾患に病理学的検査を行い、その結果を評価できる。
100	頭頸部悪性腫瘍のTNM分類を判断できる。
101	頭頸部悪性腫瘍に対する予後予測を含め、適切な治療法の選択ができる。
102	頸部膿瘍の切開排膿ができる。
103	良性の頭頸部腫瘍摘出(リンパ節生検を含む)ができる。
104	早期頭頸部癌に対する手術ができる。
105	進行頭頸部癌に対する手術(頸部郭清術を含む)の助手が務められる。
106	頭頸部癌の術後管理ができる。
107	頭頸部癌に対する放射線治療の適応を判断できる。
108	頭頸部癌に対する化学療法 of 適応を理解し、施行できる。
109	頭頸部癌に対する支持療法の必要性を理解し、施行できる。
110	頭頸部癌治療後の後遺症を理解し対応できる。

表 2. 症例経験基準数

専攻医は 4 年間の研修期間中に以下の疾患について、外来あるいは入院患者を担当医として実際に診療経験しなければならない。なお、手術や検査症例との重複は可能である。

難聴・中耳炎 25 例以上、めまい・平衡障害 20 例以上、顔面神経麻痺 5 例以上、アレルギー性鼻炎 10 例以上、鼻・副鼻腔炎 10 例以上、外傷・鼻出血 10 例以上、扁桃感染症 10 例以上、嚥下障害 10 例以上、口腔・咽頭腫瘍 10 例以上、喉頭腫瘍 10 例以上、音声・言語障害 10 例以上、呼吸障害 10 例以上、頭頸部良性腫瘍 10 例以上、頭頸部悪性腫瘍 20 例以上、リハビリテーション（難聴、めまい・平衡障害、顔面神経麻痺、音声・言語、嚥下）10 例以上、緩和医療 5 例以上

(1) 以下の領域の疾患について、外来・入院患者の検査、診断、治療を担当医として実際に経験し指導医の指導監督を受ける。	基準症例数
難聴・中耳炎	25 例以上
めまい・平衡障害	20 例以上
顔面神経麻痺	5 例以上
アレルギー性鼻炎	10 例以上
副鼻腔炎	10 例以上
外傷、鼻出血	10 例以上
扁桃感染症	10 例以上
嚥下障害	10 例以上
口腔、咽頭腫瘍	10 例以上
喉頭腫瘍	10 例以上
音声・言語障害	10 例以上
呼吸障害	10 例以上
頭頸部良性腫瘍	10 例以上
頭頸部悪性腫瘍	20 例以上
リハビリテーション（難聴、めまい・平衡障害、顔面神経麻痺、音声・言語、嚥下）	10 例以上
緩和医療	5 例以上
(2) 基本的手術手技の経験: 術者あるいは助手として経験する。 ((1)の症例との重複は認める。)	

耳科手術	20例以上	鼓膜形成術、鼓室形成術、乳突削開術、人工内耳、アブミ骨手術、顔面神経減荷術	
鼻科手術	40例以上	内視鏡下鼻副鼻腔手術	
口腔咽喉頭手術	40例以上	扁桃摘出術	20 例以上
		舌、口腔、咽頭腫瘍摘出術	5 例以上
		喉頭微細手術、嚥下機能改善、誤嚥防止、音声機能改善手術	15 例以上
頭頸部腫瘍手術	30例以上	頸部郭清術	10 例以上
		頭頸部腫瘍摘出術（唾液腺、甲状腺、喉頭、頸部腫瘤等）	20 例以上
(3)個々の手術経験:術者として経験する。((1)、(2)との重複は認める。)			
扁桃摘出術		術者として10例以上	
鼓膜チューブ挿入術		術者として10例以上	
喉頭微細手術		術者として10例以上	
内視鏡下鼻副鼻腔手術		術者として20例以上	
気管切開術		術者として5例以上	
良性腫瘍摘出術(リンパ節生検を含む。)		術者として10例以上	

3. 年次ごとの達成目標（表3）

【1年目】

A. 研修基幹病院において

一般目標：耳鼻咽喉科医としての基本的臨床能力および医療人としての基本的姿勢を身につける。
このために、代表的な疾患や主要症候に適切に対処できる知識、技能、診療態度および臨床問題解決能力の習得と人間性の向上に努める。

行動目標 #は表1、表3を参照

基本姿勢・態度

研修到達目標（基本姿勢・態度）：#1, 3~5, 7, 9~20

基本的知識

研修到達目標（耳）：#22-28

研修到達目標（鼻・副鼻腔）：#44-49

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#65-75

研修到達目標（頭頸部腫瘍）：#89-94

基本的診断・治療

研修到達目標（耳）：#29-33

研修到達目標（鼻・副鼻腔）：#50-59, 61~63

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#76-82

研修到達目標（頭頸部）：#95-100, 103~106

経験すべき治療など

術者あるいは助手を務めることができる。

耳科手術（鼓膜切開術、鼓膜チューブ挿入術、鼓室形成術など）

鼻科手術（鼻中隔矯正術、下鼻甲介切除術、内視鏡下鼻副鼻腔手術など）

口腔咽喉頭手術（口蓋扁桃摘出術、アデノイド切除術、舌・口腔・咽頭腫瘍摘出術、喉頭微細手術など）

頭頸部腫瘍手術（頸部リンパ節生検、頸部郭清術、頭頸部腫瘍摘出術など）

経験すべき検査

下記の検査を自ら実施し、その結果を解釈できる。

聴覚検査：純音聴力検査、語音聴力検査、ティンパノメトリー、自記オーディオメトリー検査、
耳音響放射検査、幼児聴力検査

平衡機能検査：起立検査、頭位および頭位変換眼振検査、温度眼振検査、視運動性眼振検査、
視標追跡検査、重心動揺検査

耳管機能検査

鼻アレルギー検査（鼻汁好酸球検査、皮膚テストまたは誘発テスト）

嗅覚検査（静脈性嗅覚検査、基準嗅覚検査）

鼻腔通気度検査

中耳・鼻咽腔・喉頭内視鏡検査

味覚検査（電気味覚検査またはろ紙ディスク法）

喉頭ストロボスコープ検査、音声機能検査、音響分析検査

超音波（エコー）検査（頸部、唾液腺、甲状腺）、穿刺吸引細胞診（頸部、唾液腺、甲状腺）

嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査

研修内容

専攻医は入院患者の管理を行う。

入院予定患者のカンファレンス（ex.月曜日 15:00-16:00）

放射線治療患者のカンファレンス（ex.隔週月曜日 18:30-19:00）

嚥下障害患者のカンファレンス（ex.金曜日 17:30-18:00）

画像カンファレンス（ex.隔週水曜日 16:00-17:00）

総回診（ex.月曜日 16:00-17:30）

医局会・抄読会（ex.火曜日 18:00-19:00）

耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の解剖や生理に関する医局勉強会（ex.不定期、1回/月）

嚥下・音声・言語に関する医局勉強会（ex.隔週火曜日 19:30-20:30）

専門外来については難聴、中耳炎、めまい、補聴器、鼻副鼻腔炎、嗅覚、音声、嚥下、頭頸部腫瘍の各分野をローテートする。

医療倫理、医療安全、感染対策に関する講習会にそれぞれ2回以上出席する。

学会または研修会に参加し、日耳鼻が定めた学会において年1回以上発表を行う。

【2年目】

A. 地域中核病院において

一般目標：地域の中核病院において、耳鼻咽喉科領域のプライマリー疾患に対する診断および治療の実地経験を積む。また、地域医療の現場を体験することでその地域における耳鼻咽喉科医療のニーズと役割を理解する。

行動目標

基本姿勢・態度

研修到達目標（基本姿勢・態度）：#1-5, 7, 9-21

基本的知識

研修到達目標（耳）：#34

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#72-75

基本的診断・治療

研修到達目標（耳）：#29-33, 40-43

研修到達目標（鼻・副鼻腔）：#52-64

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#76-83, 86-88

研修到達目標（頭頸部）：#95-100, 103, 105-106

経験すべき治療など

術者あるいは助手を務めることができる。

耳科手術（鼓膜切開術、鼓膜チューブ挿入術、鼓室形成術、人工内耳手術など）

※人工内耳手術および術後の聴覚訓練は日耳鼻大学医学部附属病院において研修する。

鼻科手術（鼻中隔矯正術、下鼻甲介切除術、内視鏡下鼻副鼻腔手術など）

口腔咽喉頭手術（口蓋扁桃摘出術、アデノイド切除術、舌・口腔・咽頭腫瘍摘出術、喉頭微細手術など）

頭頸部腫瘍手術（頸部リンパ節生検、頭頸部腫瘍摘出術など）

緩和医療

経験すべき検査

聴覚検査、平衡機能検査、鼻アレルギー検査、鼻咽腔・喉頭内視鏡查、嗅覚検査、味覚検査、超音波（エコー）検査（頸部、唾液腺、甲状腺）、穿刺吸引細胞診（頸部、唾液腺、甲状腺）、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査など

研修内容

研修内容は耳鼻咽喉科のプライマリー疾患の診断とその対応に重点を置く。

専攻医は指導医とともに、外来診療と病棟診療を行う。

夜間や休日の当直を行い、各種の救急疾患に対応する。

院内症例カンファレンス（随時）

術前・術後カンファレンス（週 1 回）

医療倫理、医療安全、感染対策に関する講習会にそれぞれ年 1 回以上出席する。

学会または研修会に参加し、日耳鼻が定めた学会において年 1 回以上発表を行う。

B. 特定機能病院において

一般目標：特定機能病院において、代表的な耳鼻咽喉科疾患、特に音声・嚥下障害や頭頸部腫瘍に対する診断および治療の実地経験を積むとともに、高度先進医療の実地経験も深める。院内および院外における他科医師や医療スタッフとのチーム医療を実践し、病病連携、病診連携遂行能力の向上を図る。

行動目標

基本姿勢・態度

研修到達目標（基本姿勢・態度）：#1-5, 7, 9-21

基本的知識

研修到達目標（耳）：#34

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#72-75

基本的診断・治療

研修到達目標（耳）：#29-33, 40-43

研修到達目標（鼻・副鼻腔）：#52-64

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#76-83, 86-88

研修到達目標（頭頸部）：#95-100, 103, 105-106

経験すべき治療など

術者あるいは助手を務めることができる。

耳科手術（鼓膜切開術、鼓膜チューブ挿入術、鼓室形成術、人工内耳手術など）

鼻科手術（鼻中隔矯正術、下鼻甲介切除術、内視鏡下鼻副鼻腔手術など）

口腔咽喉頭手術（口蓋扁桃摘出術、アデノイド切除術、舌・口腔・咽頭腫瘍摘出術、喉頭微細

手術、嚥下機能改善、誤嚥防止、音声機能改善手術など)

頭頸部腫瘍手術(頸部リンパ節生検、頭頸部腫瘍摘出術など)

経験すべき検査

聴覚検査、平衡機能検査、鼻アレルギー検査、鼻咽腔・喉頭内視鏡查、嗅覚検査、味覚検査、超音波(エコー)検査(頸部、唾液腺、甲状腺)、穿刺吸引細胞診(頸部、唾液腺、甲状腺)、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査、中耳機能検査(鼓膜穿孔閉鎖検査)、内耳機能検査(ABLBテスト、SISIテスト)、聴性脳幹反応検査、補聴器適合検査、新生児聴覚スクリーニング検査、顔面神経予後判定(NET、ENoG)など

研修内容

専攻医は入院患者の管理および外来患者の診療を行う。

入院予定患者のカンファレンス(ex.月曜日 15:00-16:00)

放射線治療患者のカンファレンス(ex.隔週月曜日 18:30-19:00)

嚥下障害患者のカンファレンス(ex.金曜日 17:30-18:00)

画像カンファレンス(ex.隔週水曜日 16:00-17:00)

総回診(ex.月曜日 16:00-17:30)

医局会・抄読会(ex.火曜日 18:00-19:00)

耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の解剖や生理に関する医局勉強会(不定期、1回/月)

嚥下・音声・言語に関する医局勉強会(ex.隔週火曜日 19:30-20:30)

医療倫理、医療安全、感染対策に関する講習会にそれぞれ2回以上出席する。

学会または研修会に参加し、日耳鼻が定めた学会において4年間のうちに3回以上発表を行う。

筆頭著者として学術雑誌に4年間のうちに1編以上の論文を執筆する。

【3年目】

A. 地域の病院において

一般目標：地域の病院において、耳鼻咽喉科領域のプライマリー疾患に対する診断および治療の実地経験を積む。また、各種の耳鼻咽喉科疾患に対する実地経験を深め、自らが診断および治療方針決定を行う。院内および院外における他科医師や医療スタッフとのチーム医療を実践し、病病連携、病診連携遂行能力の向上を図る。

行動目標

基本姿勢・態度

研修到達目標（基本姿勢・態度）：#1-21

基本的診断・治療

研修到達目標（耳）：#33-39, 42

研修到達目標（鼻・副鼻腔）：#54, 60, 62, 64

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#78-80, 83-85, 87

研修到達目標（頭頸部）：#101-110

経験すべき治療など

術者あるいは助手を務めることができる。

耳科手術（鼓室形成術、アブミ骨手術など）

鼻科手術（鼻中隔矯正術、内視鏡下鼻副鼻腔手術など）

口腔咽喉頭手術（舌・口腔・咽頭腫瘍摘出術、喉頭微細手術、嚥下機能改善、誤嚥防止、音声機能改善手術など）

頭頸部腫瘍手術（頸部リンパ節生検、頸部良性腫瘍摘出術、頭頸部腫瘍摘出術など）

経験すべき検査

聴覚検査、平衡機能検査、鼻アレルギー検査、鼻咽腔・喉頭内視鏡検査、嗅覚検査、味覚検査、超音波（エコー）検査（頸部、唾液腺、甲状腺）、穿刺吸引細胞診（頸部、唾液腺、甲状腺）、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査など

研修内容

研修内容は耳鼻咽喉科のプライマリー疾患の診断と対応、および口腔咽喉頭手術経験を積むことに重点を置く。

専攻医は指導医とともに外来診療と病棟診療を行い、チーム医療を実践する。

夜間や休日の当直を行い、各種の救急疾患に対応する。

院内症例カンファレンス（随時）

術前・術後カンファレンス（週 1 回）

医療倫理、医療安全、感染対策に関する講習会にそれぞれ年 1 回以上出席する。

学会または研修会に参加し、日耳鼻が定めた学会において年 1 回以上発表を行う。

【4年目】

A. 研修基幹病院、研修連携病院において

一般目標：頭頸部腫瘍に対する診断および治療の実地経験、特に化学療法や手術の手技および術後管理の経験を積む。音声・嚥下障害や頭頸部腫瘍に対する診断および治療の実地経験を積むとともに、高度先進医療の実地経験も深める。耳鼻咽喉科領域のプライマリー疾患に対する診断および治療の実地経験、特に耳科手術および鼻科手術を中心とした手術経験を積む。それにより耳鼻咽喉科領域の代表的な疾患や主要症候に適切に対処するべく、これまで習得した知識、技能、態度および臨床問題解決法を発展させ、耳鼻咽喉科専門医としてふさわしい知識と診療能力を身につける。全人的医療の精神に基づいた高い倫理観と豊かな人間性を持ち、専門医としてチーム医療を担う自覚と信頼を有する医師となる。

行動目標

基本姿勢・態度

研修到達目標:#1-21

基本的診断・治療

研修到達目標（耳）：#34-39, 42

研修到達目標（鼻・副鼻腔）：#60, 62, 64

研修到達目標（口腔咽喉頭）：#83-85, 87

研修到達目標（頭頸部）：#101-110

経験すべき検査

超音波（エコー）検査（頸部、唾液腺、甲状腺）、穿刺吸引細胞診（頸部、唾液腺、甲状腺）、嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査、中耳機能検査（鼓膜穿孔閉鎖検査）、補聴器適合検査、顔面神経予後判定（NET、ENoG）など

研修内容

専攻医は入院患者の管理および外来患者の診療を行う。

研修内容は耳科手術経験を積むことに重点を置く。

研修内容は頭頸部腫瘍手術経験を積むことに重点を置く。

専攻医は外来および入院患者の診療を行う。入院患者は疾患の病態や経過を適切に評価・管理し、退院の判断を行う。

入院予定患者のカンファレンス（ex.火曜日 17:00-18:00）

放射線治療患者のカンファレンス（ex.隔週月曜日 18:30-19:00）

嚥下障害患者のカンファレンス (ex.金曜日 17:30-18:00)

画像カンファレンス (ex.隔週水曜日 16:00-17:00)

論文抄読会 (ex.月曜日 8:00-9:00)

医療倫理、医療安全、感染対策に関する講習会にそれぞれ 1 回以上出席する。

学会または研修会に参加し、日耳鼻が定めた学会において 4 年間のうちに 3 回以上発表を行う。

筆頭著者として学術雑誌に 4 年間のうちに 1 編以上の論文を執筆する。

表 3. 年次ごとの研修到達目標

下記の目標につき専門医としてふさわしいレベルが求められる。

研修年度		1	2	3	4
基本姿勢・態度					
1	患者、家族のニーズを把握できる。	○	○	○	○
2	インフォームドコンセントが行える。		○	○	○
3	守秘義務を理解し、遂行できる。	○	○	○	○
4	他科と適切に連携ができる。	○	○	○	○
5	他の医療従事者と適切な関係を構築できる。	○	○	○	○
6	後進の指導ができる。			○	○
7	科学的根拠となる情報を収集し、それを適応できる。	○	○	○	○
8	研究や学会活動を行う。			○	○
9	科学的思考、課題解決型学習、生涯学習の姿勢を身につける。	○	○	○	○
10	医療事故防止および事故への対応を理解する。	○	○	○	○
11	インシデントリポートを理解し、記載できる。	○	○	○	○
12	症例提示と討論ができる。	○	○	○	○
13	学術集会に積極的に参加する。	○	○	○	○
14	医事法制、保険医療法規・制度を理解する。	○	○	○	○
15	医療福祉制度、医療保険・公費負担医療を理解する。	○	○	○	○
16	医の倫理・生命倫理について理解し、行動する。	○	○	○	○
17	感染対策を理解し、実行できる。	○	○	○	○
18	医薬品などによる健康被害の防止について理解する。	○	○	○	○
19	医療連携の重要性とその制度を理解する。	○	○	○	○
20	医療経済について理解し、それに基づく診療実践ができる。	○	○	○	○
21	地域医療の理解と診療実践ができる。(病診、病病連携、地域包括ケア、在宅医療、地方での医療経験)		○	○	○
耳					
22	側頭骨の解剖を理解する。	○			
23	聴覚路、前庭系伝導路、顔面神経の走行を理解する。	○			
24	外耳・中耳・内耳の機能について理解する。	○			
25	中耳炎の病態を理解する。	○			
26	難聴の病態を理解する。	○			

27	めまい・平衡障害の病態を理解する。	○			
28	顔面神経麻痺の病態を理解する。	○			
29	外耳・鼓膜の所見を評価できる。	○	○		
30	聴覚検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
31	平衡機能検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
32	耳管機能検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
33	側頭骨およびその周辺の画像(CT、MRI)所見を評価できる。	○	○	○	
34	人工内耳の仕組みと言語聴覚訓練を理解する。		○	○	○
35	難聴患者の診断ができる。			○	○
36	めまい・平衡障害の診断ができる。			○	○
37	顔面神経麻痺の患者の治療と管理ができる。			○	○
38	難聴患者の治療・補聴器指導ができる。			○	○
39	めまい・平衡障害患者の治療、リハビリテーションができる。			○	○
40	鼓室形成術の助手が務められる。	○	○		
41	アブミ骨手術の助手が務められる。	○	○		
42	人工内耳手術の助手が務められる。		○	○	○
43	耳科手術の合併症、副損傷を理解し、術後管理ができる。	○	○		
鼻・副鼻腔					
44	鼻・副鼻腔の解剖を理解する。	○			
45	鼻・副鼻腔の機能を理解する。	○			
46	鼻・副鼻腔炎の病態を理解する。	○			
47	アレルギー性鼻炎の病態を理解する。	○			
48	嗅覚障害の病態を理解する。	○			
49	鼻・副鼻腔腫瘍の病態を理解する。	○			
50	細菌・真菌培養、アレルギー検査を実施し、その所見を評価できる。	○			
51	鼻咽腔内視鏡検査を実施し、その所見を評価できる。	○			
52	嗅覚検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
53	鼻腔通気度検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
54	鼻・副鼻腔の画像(CT、MRI)所見を評価できる。	○	○	○	
55	鼻・副鼻腔炎の診断ができる。	○	○		
56	アレルギー性鼻炎の診断ができる。	○	○		
57	鼻・副鼻腔腫瘍の診断ができる。	○	○		

58	顔面外傷の診断ができる。	○	○		
59	鼻中隔矯正術、下鼻甲介手術が行える。	○	○		
60	鼻茸切除術・篩骨洞手術・上顎洞手術などの副鼻腔手術が行える。		○	○	○
61	鼻・副鼻腔腫瘍手術の助手が務められる。	○	○		
62	鼻出血の止血ができる。	○	○	○	○
63	鼻科手術の合併症、副損傷を理解し、術後管理ができる。	○	○		
64	鼻骨骨折、眼窩壁骨折などの外科治療ができる。		○	○	○
口腔咽喉頭					
65	口腔、咽頭、唾液腺の解剖を理解する。	○			
66	喉頭、気管、食道の解剖を理解する。	○			
67	扁桃の機能について理解する。	○			
68	摂食、咀嚼、嚥下の生理を理解する。	○			
69	呼吸、発声、発語の生理を理解する。	○			
70	味覚障害の病態を理解する。	○			
71	扁桃病巣感染の病態を理解する。	○			
72	睡眠時呼吸障害の病態を理解する。	○	○		
73	摂食・咀嚼・嚥下障害の病態を理解する。	○	○		
74	発声・発語障害の病態を理解する。	○	○		
75	呼吸困難の病態を理解する。	○	○		
76	味覚検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
77	喉頭内視鏡検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○		
78	睡眠時呼吸検査の結果を評価できる。	○	○	○	
79	嚥下内視鏡検査、嚥下造影検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○	○	
80	喉頭ストロボスコープ検査、音声機能検査を実施し、その所見を評価できる。	○	○	○	
81	口蓋扁桃摘出術、アデノイド切除術ができる。	○	○		
82	咽頭異物の摘出ができる。	○	○		
83	睡眠時呼吸障害の治療方針が立てられる。		○	○	○
84	嚥下障害に対するリハビリテーションや外科的治療の適応を判断できる。			○	○
85	音声障害に対するリハビリテーションや外科的治療の適応を判断できる。			○	○

86	喉頭微細手術を行うことができる。	○	○		
87	緊急気道確保の適応を判断し、対処できる。		○	○	○
88	気管切開術とその術後管理ができる。	○	○		
頭頸部腫瘍					
89	頭頸部の解剖を理解する。	○			
90	頭頸部の生理を理解する。	○			
91	頭頸部の炎症性および感染性疾患の病態を理解する。	○			
92	頭頸部の先天性疾患の病態を理解する。	○			
93	頭頸部の良性疾患の病態を理解する。	○			
94	頭頸部の悪性腫瘍の病態を理解する。	○			
95	頭頸部の身体所見を評価できる。	○	○		
96	頭頸部疾患に内視鏡検査を実施し、その結果が評価できる。	○	○		
97	頭頸部疾患に対する血液検査の適応を理解し、その結果を評価できる。	○	○		
98	頭頸部疾患に対する画像診断の適応を理解し、その結果を評価できる。	○	○		
99	頭頸部疾患に病理学的検査を行い、その結果を評価できる。	○	○		
100	頭頸部悪性腫瘍のTNM分類を判断できる。	○	○		
101	頭頸部悪性腫瘍に対する予後予測を含め、適切な治療法の選択ができる。			○	○
102	頸部膿瘍の切開排膿ができる。			○	○
103	良性の頭頸部腫瘍摘出(リンパ節生検を含む)ができる。	○	○	○	
104	早期頭頸部癌に対する手術ができる。			○	○
105	進行頭頸部癌に対する手術(頸部郭清術を含む)の助手が務められる。	○	○	○	○
106	頭頸部癌の術後管理ができる。	○	○	○	○
107	頭頸部癌に対する放射線治療の適応を判断できる。			○	○
108	頭頸部癌に対する化学療法 of 適応を理解し、施行できる。			○	○
109	頭頸部癌に対する支持療法の必要性を理解し、施行できる。			○	○
110	頭頸部癌治療後の後遺症を理解し対応できる。			○	○

症例経験

専攻医は4年間の研修期間中に以下の疾患について、外来あるいは入院患者を担当医として実際に診療経験しなければならない。なお、手術や検査症例との重複は可能である。

難聴・中耳炎 25 例以上、めまい・平衡障害 20 例以上、顔面神経麻痺 5 例以上、アレルギー性鼻炎 10 例以上、鼻・副鼻腔炎 10 例以上、外傷・鼻出血 10 例以上、扁桃感染症 10 例以上、嚥下障害 10 例以上、口腔・咽頭腫瘍 10 例以上、喉頭腫瘍 10 例以上、音声・言語障害 10 例以上、呼吸障害 10 例以上、頭頸部良性腫瘍 10 例以上、頭頸部悪性腫瘍 20 例以上、リハビリテーション（難聴、めまい・平衡障害、顔面神経麻痺、音声・言語、嚥下）10 例以上、緩和医療 5 例以上

* 以下に年次別の症例経験基準の1例を示す

(2) 以下の領域の疾患について、外来・入院患者の検査、診断、治療を担当医として実際に経験し指導医の指導監督を受ける。	基準症例数	研修年度			
		1	2	3	4
難聴・中耳炎	25 例以上	10	5	5	5
めまい・平衡障害	20 例以上	5	5	10	
顔面神経麻痺	5例以上	2	2	1	
アレルギー性鼻炎	10 例以上	3	7		
副鼻腔炎	10 例以上	5	5		
外傷、鼻出血	10 例以上	2	5	3	
扁桃感染症	10 例以上	2	4	4	
嚥下障害	10 例以上	2	2	2	4
口腔、咽頭腫瘍	10 例以上	3	3	2	2
喉頭腫瘍	10 例以上	3	3	2	2
音声・言語障害	10 例以上	2	2	2	4
呼吸障害	10 例以上	3	3	4	
頭頸部良性腫瘍	10 例以上	3	3		4
頭頸部悪性腫瘍	20 例以上	6	6		8
リハビリテーション(難聴、めまい・平衡障害、顔面神経麻痺、音声・言語、嚥下)	10 例以上	2	2	2	4
緩和医療	5 例以上	1	1	1	2
(2) 基本的手術手技の経験: 術者あるいは助手として経験する。					

((1)の症例との重複は認める。)							
耳科手術	20例以上	鼓膜形成術、鼓室形成術、乳突削開術、人工内耳、アブミ骨手術、顔面神経減荷術		5	5		10
鼻科手術	40例以上	内視鏡下鼻副鼻腔手術		10	10	10	10
口腔咽喉頭手術	40例以上	扁桃摘出術	20 例以上	10	5	5	
		舌、口腔、咽頭腫瘍摘出術	5 例以上	2	2		1
		喉頭微細手術、嚥下機能改善、誤嚥防止、音声機能改善手術	15 例以上	5	5		5
頭頸部腫瘍手術	30例以上	頸部郭清術	10 例以上	2	3		5
		頭頸部腫瘍摘出術(唾液腺、甲状腺、喉頭、頸部腫瘤等)	20 例以上	10		5	5
(3)個々の手術経験:術者として経験する。((1)、(2)との重複は認める。)							
扁桃摘出術		術者として10例以上		5	5		
鼓膜チューブ挿入術		術者として10例以上		2	2	5	
喉頭微細手術		術者として10例以上		2	2	2	4
内視鏡下鼻副鼻腔手術		術者として20例以上			5	5	10
気管切開術		術者として5例以上		1	2	2	
良性腫瘍摘出術(リンパ節生検を含む。)		術者として10例以上		1	3	3	3

4. 学術活動

専門研修中、次の事を習得し、研修中に論文の執筆、学会発表を行う。

- 1) 科学的根拠となる情報を収集し、それを適応できること。
- 2) 研究や学会発表、論文執筆を行うこと。
- 3) 科学的思考、課題解決型学習、生涯学習の姿勢を身につけること。
- 4) 学術集会に積極的に参加すること。
- 5) 日耳鼻が認定する「検査に関する実技講習」に参加すること。

以下の目標が課せられている

論文：筆頭著者として1編以上の学術論文を執筆すること。

学会発表：日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会ならびにその関連学会で3回以上学術発表を行うこと。

講習会受講：日耳鼻が指定する共通講習A（医療安全、感染対策、医療倫理）の講習会を、それぞれ1回以上受講すること。

総会・秋季大会参加：専門研修の期間に、日耳鼻総会・学術講演会および日耳鼻秋季大会に各1回以上参加すること。

実技講習：専門研修の期間に、日耳鼻が認定する「検査に関する実技講習」に1回以上参加すること。

5. 研修評価 *研修記録簿（エクセルを使用）

1) 形成的評価

- ① 研修内容の改善を目的として、研修中の専攻医の不足部分を明らかにし、フィードバックするために随時行われる評価である。
- ② 専攻医は研修状況を研修記録簿（エクセルを使用）に随時記録し、専門研修指導医が評価を行う。
- ③ 専門研修プログラム管理委員会は専門研修プログラムに対するフィードバックシステムを確立し、その項目について専門研修指導医が学習する機会を設ける。

2) 総括的評価

- ① 専門研修プログラムにおいて専攻医の目標達成度を総括的に把握するため研修の節目で行われる評価である。
- ② 評価内容は医師としての倫理性・社会性、知識、診療技術、手術の到達度、学術活動についてである。
- ③ 専門研修終了時に、プログラム統括責任者が総括的な評価を行い、専攻医の研修修了を認定する。

3) その他

- ① 専攻医に対する評価は、専門研修指導医によるものだけでなく、メデイカルスタッフおよび施設責任者などによる多職種評価を考慮すること。
- ② 専攻医による専門研修指導医に対する評価を行う。
- ③ 専攻医による専門研修プログラムに対する評価を行う。
- ④ 専門研修プログラム管理委員会は、専門研修指導医、専門研修プログラムに対する評価を活用して専門研修プログラムの改良を行う。
- ⑤ 評価の記録を保存する体制を整備する。

4) 外部評価

- ① 上記のプログラム内部評価とともに、日本専門医機構による外部評価を受ける（サイトビジット）。

* なお、プログラムを形成する研修施設は日耳鼻が定めた耳鼻咽喉科専門研修施設の医療設備基準を満たしていることが必要である。

耳鼻咽喉科専門研修施設の医療設備基準

聴覚機能検査設備	純音オーディオメータ
	語音聴力検査装置
	インピーダンスオーディオメータ
	自記オーディオメータ
	聴性誘発反応検査装置
	耳音響放射検査装置
	補聴器適合検査装置
	乳幼児聴力検査装置
	耳管機能検査装置
平衡機能検査設備	フレンツェル眼鏡（赤外線 CCD カメラ）
	ENG（または VOG）
	視運動性眼振検査装置
	視標追跡検査装置
	重心動揺計
顔面神経検査設備	電気神経検査（ENoG）装置
	神経興奮性検査（NET）装置
鼻機能検査設備	鼻腔通気度検査装置
	嗅覚機能検査装置
味覚検査設備	味覚機能検査装置
音声機能検査設備	動画記録装置付喉頭内視鏡
	喉頭ストロボスコープ
	音響分析装置または発声機能検査装置
画像診断設備	CT
	MRI
	超音波診断装置
	核医学検査装置（PET または RI シンチ）
	X線透視装置
内視鏡検査設備	鼻咽喉内視鏡
	中耳内視鏡
	気管支鏡
	食道鏡

手術支援設備	手術用ナビゲーションシステム
	手術用顕微鏡（録画装置付き）
	鼻副鼻腔内視鏡手術システム（録画装置付き）
	喉頭微細手術システム
	神経刺激装置
放射線治療設備	放射線治療装置
睡眠検査設備	睡眠検査装置（P S Gまたはアプノモニター）